

# 非西洋に向かうカトリック

法王ベネディクト16世が退位を表明し、世界各地で大きな話題となった。それはカトリックやそのトップである法王の宗教界を超えた影響力の大きさを物語っている。

現在地球上の全人口のうち3割がキリスト教徒であるが、そのほぼ半分をカトリックが占めている。プロテスタントは無数の「教派」に分かれているため、単一の団体としてカトリックに比肩するものは存在しない。かつて、カトリックは西洋の宗教というイメージが強かった。歴史的に見れば、1世紀ほど前にはカトリック人口の3分の2はヨーロッパにいたが、現在では、ヨーロッパのカトリック人口は全体の4分の1を占めるに過ぎない。つまりカトリックは、さらに言えばキリスト教は、人口比的には、もはやヨーロッパの宗教ではない。

カトリックの場合、その4割がラテンアメリカとカリブ諸国に住んでおり、カトリック人口の伸長が大きいのはアフリカやアジアである。つまり、カトリックの総体としての大きさは時代を超えて変わらないものの、その中心点や成長点は、明らかに非西洋世界に移動している。

## 「世俗化」進み 信者減る欧州

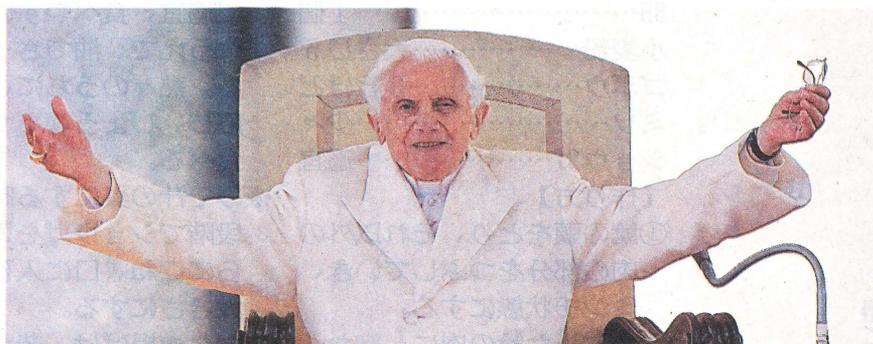


小原 克博  
同志社大  
神学部教授

こはら・かつひろ 1965年生まれ。専門はキリスト教思想、一神教研究。著書に「宗教のポリテイクス——日本社会と一神教世界の邂逅（かいこう）」など。

そして、このことが次期法王の選出にも一定の影響を与えている。伝統的にはヨーロッパから法王が選ばれてきたが、少なくとも人口比的に言えば、ヨーロッパ以外から法王が選出された方が、より多くのカトリック信者の声を代弁できるようになる。実際、非欧州圏からの選出を望む声は小さくなく、有力候補の中にはアフリカ出身の枢機卿たちの名があがっている。

カトリックは確かにグローバルな宗教であるが、いくつもの地域では苦戦を強いられている。その一つは「世俗化」が進んでいるヨーロッパである。ベネディクト16世が繰り



バチカンのサンピエトロ広場で2月27日、最後となる一般向けスピーチをするローマ法王ベネディクト16世＝AP

## 改革・調停役 次期法王に期待

ている。今世紀になってから各地で発覚したカトリック司祭による児童に対する性的虐待問題も、それに拍車をかけた。また、カトリックが批判してきた中絶や同性婚についても、それを合法化する国が増えている。

今なお圧倒的な存在感を示しているカトリックであるが、このような時代の変化や内部の問題に十分に対応し切れていないという危機意識は広まっており、次の法王にもその課題が引き継がれていくことになる。危機は改革のための好機でもある。

バチカンがその保守的な神学的・道徳的姿勢を大きく変えることはないだろう。しかし、カトリックは決して一枚岩ではなく、改革や変化を求める声は非常に強い。そうした声に耳を傾け、同時に、カトリックの外の世界との対話にも積極的であることが次の法王には期待される。

西洋的価値と非西洋的価値の葛藤は、植民地主義の刻印をともなっていて、今なお続いている。法王は伝統的道徳の守護者として見られることが多いが、これからはそれにとどまらず、異なる価値観のよき調停者としての役割も期待したい。

返し主張してきたのは「世俗化」との戦いであった。世俗化とは、簡単に言えば、信者数の減少であり、教会的価値からの離反である。ヨーロッパには観光客の関心を引く、歴史のある巨大な教会が数多く存在しているが、礼拝出席者は減少し続け